

# 「れいぎ礼儀の国」日本

江戸時代前期に日本を訪れたドイツの医師、エンゲルベルト・ケンペルは、次のような文章を書き残しています。

「世界中のいかなる国民でも、礼儀という点で日本人にまさるものはない。(略) われわれは国全体を礼儀作法を教える高等学校と呼んでもよからう」

また、幕末から明治にかけて日本で活躍したイギリスのジャーナリスト、ジョン・レディー・ブラックは、道で会う全ての人が「おはよう」と挨拶あいさつしてくれると書き残しています。

さらに、昭和初期に来日したドイツ人建築家のブルーノ・タウトもまた、公共交通機関を利用したときに、運転手や車掌しゃしょうが非常に礼儀正しいことに感動しています。

時代が変わり、生活様式が変わっても、日本人古来の礼儀正しさが失われなかったことがわかります。

礼儀は、日本人の生活を豊かにしてきました。特に、異文化との交流においては、非常に重要な役割を担になっています。

令和の時代も、日本人への評価が変わらないよう、努力したいものです。

## 今日の言葉

「ほこ礼儀の国」の誇りを守りましょう

今日の気づき

コメント

エンゲルベルト・ケンペル (1651～1716年) ドイツの医学者。1690年にオランダ東インド会社の医師として来日。『日本誌』『江戸参府紀行』など著述。  
ジョン・レディー・ブラック (1827～1880年) 幕末に来日し、『ジャパ・ヘラルド』(日本で最初の英字新聞)をはじめとする新聞事業を展開。  
ブルーノ・タウト(1880～1938年) ドイツの建築家。ナチスから逃れるため1933年に来日。